



水琴窟の完成…

(昭和40年頃まで洞水門と言われていた)

酷暑の夏に 清涼な響きを…

水を使った音の出る庭の構造物では、西洋と日本では大きな違いがあります。噴水が主の西洋に対し、鹿威し(ししおどし)など雨など自然が発する音が主であり、人工的な音に対し密かな音を楽しむものが日本です。

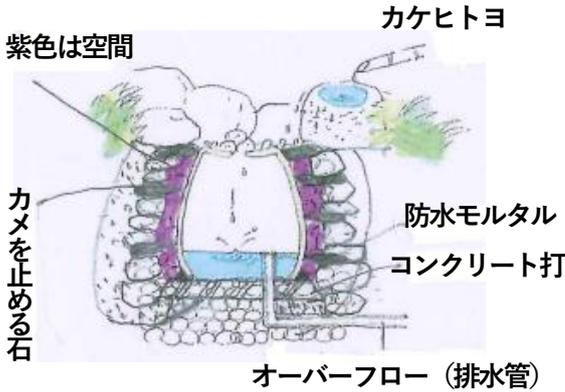
今号ではS邸で作成した水琴窟を紹介してみたい。

施主は、茶道、華道はもちろん香道をも嗜む数寄者です。水琴窟の音の出る仕組みは図(1)です。

みみずつうしん 通信

(有)林庭園設計事務所
〒193-0823 東京都
八王子市横川町991-6
TEL：042-622-8840

再刊 VOL.11



図(1) 水琴窟の構造図

空洞にたまった水に、水滴を落とす反響させる仕組みです。その音色や音の大きさは、甕の大きさ、形状、材質、水の溜まり具合で決まります。今回は、常滑焼の大甕を用いました。写真(2)は、水滴が正しく落ちる様、甕が水平設置され、そのタイミングなど音色のチェックしてる途中の工程です。完成写真は、元々奥多摩の河岸段丘のそばという立地の特性を生かして、庭から出る川原石を利用し、一寸と里山の景色を創り出してみました。

水琴窟は石橋下に設置しました。



写真(2) 甕を埋め音色は？



夏から初秋にかけて、涼やかな水色の花を付けるマツムシソウ。漢字では松虫草と書く、もとより漢名の花ではない。学名では「スカビオサ・ジヤポニカ」といい、名の如く日本固有の花です。

俗名チンチロリンとなくあの昆虫が鳴く頃に咲くのでこの名が付いたというのが通説です。

「牧野新日本植物図鑑」でもマツムシソウを松虫草となっているので、その名の由来であるのが有力ではあるが、詳細は不明です。

よく演劇や、時代物映画に白い装束を着た、六部(ろくぶ)という行脚僧(あんぎやそう)が出てくる。

なおこの六部というのは、六十六部の略で、法華経の写しを一部つつ日本六十六か所の霊場に納めるため諸国巡礼いたそうでこうよんだとのこと。芝居ではこの六部の出番を、



マツムシソウ



伏鉦(ふせがね)と撞木(しゅもく)

マツムシというそうだ。この六部を持つ、仏具の鉦(カネ)をマツムシとよぶことから、この出番をこう呼ぶようになったという。

この松虫鉦の形状は、マツムシウの花後の実にそっくりである。マツムシが鳴く頃咲くからという名の由来は、あまりにも皮相的だとの反対する説がある。ちなみにスカビオサとは皮膚病の一種「疥癬」とのこと、葉に薬効があるからだろうが、美しい花には気の毒な話でもある。

天声樹話

ラニーニヤ現象により、今夏も昨年以上の猛暑と
言われています。
そこで今号では、水琴窟と見た目も涼やかな松虫草を取り上げてみました。
読者の皆様には、紙面だけでも涼風が届けば幸いです。

ここ数年、特に昨夏の気候は異常で40度越えもあるのではの様子でした。くれぐれも熱中症などに罹らぬ様お身体お大事に…。